文部科学省委託事業

平成20年度「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

2 放課後子ども活動支援モデル事業 成果報告書

（4）地域の多様な主体が連携・協力した取組

福島県鮫川村

特定非営利活動法人
あぶくまエヌエスネット

平成20年度 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

目次

＊放課後子ども活動支援モデル事業概要・・・・・1～2

＊「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」に寄せて・・・3～7
北海道教育大学岩見沢校　前田和司

＊モデル事業展開地域概要・・・8～9

＊子ども教室「放課後自遊教室」の実施報告　および活動記録写真・・・10～15

＊週末地域サポート事業の実施報告　および活動記録写真・・・16～23

＊わくわく交流事業の実施報告　および活動記録写真・・・24～31

＊「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」カレンダー・・・32

＊「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」を振り返って・・・33～34
特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット　理事長　進士　徹

付録

＊あぶくまエヌエスネット指導者12か条・・・35

＊あぶくまエヌエスネット体験交流事業推進にあたってポイント・・・36

＊特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット事業紹介・・・37～38

参考文献
福島県教育委員会　青少年体験活動 居場所事業推進協議会より
＊体験活動体系化表

＊発達段階に応じた体験活動～人間性・社会性の育成

平成20年度 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」
２ 放課後子ども活動支援モデル事業
＊（4）地域の多様な主体が連携・協力した取組事業のテーマ
山間過疎地域児童と国際交流連携を図り放課後子ども対策モデルとする。
＊事業の目的
山間過疎地域において、都市との格差は広がる一方で、国際社会への理解と交流の場を作ることで 児童の言動に学び多き体験交流の場を広める。
＊事業の背景・必要性
1）山間過疎地域において、小規模校での学習環境のメリットとデメリットがある。日常限られた人と接するだけで、話す言葉も必然と少ない現状にある。我々NPO法人あぶくまエヌエスネットは、NPO法人 NICEとの連携で外国人青年を過疎中山間地域にも迎え入れいる。

2）地元周辺児童との国際交流の機会を設け、一人でも多くの人たちと接する機会を確保し、より多くの異年齢の人とコミュニケーションを図ることによって、人格形成に大いに役立つ。都市部だったら外国人と接する事もあろうが、地域格差は広がる一方である。社会が多様化する中で、児童期において、外国人青年や高校生との交流を体験することにより将来を夢見て、国際社会に経つ広い視野と、郷土の心を育てる基盤を築くことにある。次世代にバトンタッチ出来るきっかけ作りとする。

＊事業の実施内容・方法
鮫川村立青生野小学校の児童や山間地域の児童を対象として、
1 子ども教室「放課後自遊教室」の実施
【実 施 日】 週1回放課後 28回実施
【実施内容】 集団による遊び 外国人青年 高校生 身近な大人との体験および活動

2 週末地域サポート事業の実施
【実 施 日】 週末 14回実施
【実施内容】 過疎化、少子高齢化が進むこの地域で、外国人青年交流や農的活動を蓄積した。

3 わくわく交流事業の実施
【実 施 日】 長期休業中 （夏休み期間）10回実施
【実施内容】 日頃ふれあうことのない他地域の子どもたちや外国人青年との交流をした。

4 実施方法 当NPO法人・行政区長・県教育委員会（県南教育事務所ボランティアセンター）が連携を 図り、地域や子どもたちのニーズに適合した良質なプログラムを提供、実施した。

＊事業の目標とする効果・成果

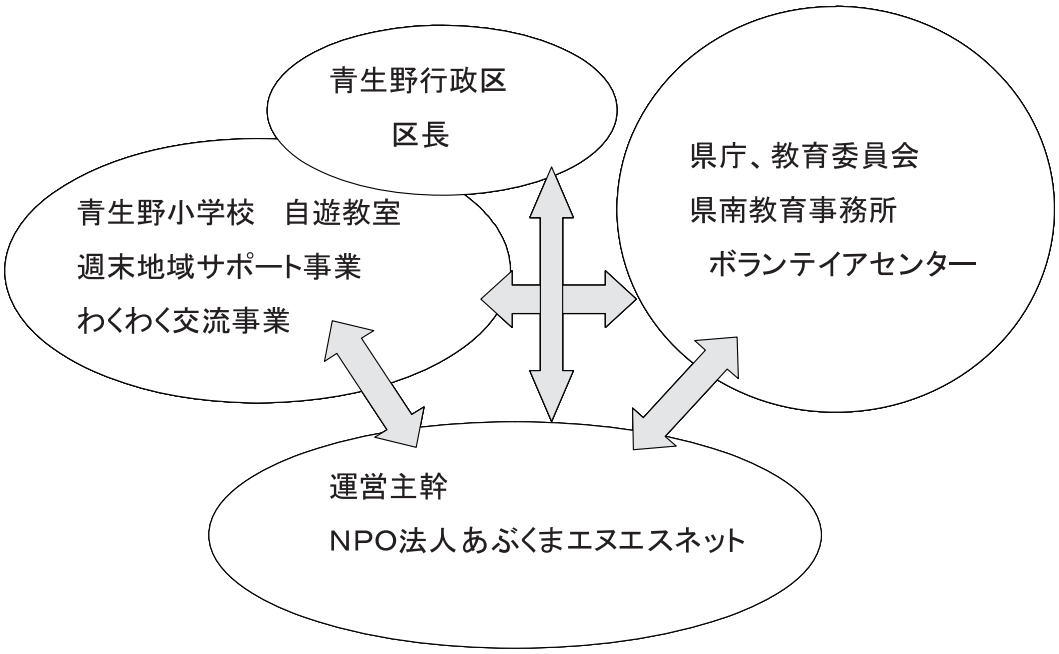
1　遊びの中から社会性を身につけ、国際性、自然、地域や人を敬い集団の中でうまく人間関係をつくれる子どもの育成。

2　多くのおとなが、事業に参加することにより、子どもを見守る目や地域を見つめる目も増え、 地域の力の向上に連鎖した。

3　成果および効果を検証し、報告書を作成した。

事業組織図

過疎中山間地域における放課後対策、子ども居場所事業



あぶくまエヌエスネット
「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」に寄せて

北海道教育大学岩見沢校　前田和司

1．農山村の光景

農山村における自然体験教育や野外教育にかかわりはじめてからずいぶんと経ちました。その中でいくつか思い浮かんでくる光景があります。

今から20数年前、山形の山村で聞き書き調査をしていた時のことです。ある家を訪ねると、その家のお婆さんが真っ青な顔をして、赤ちゃんがあめ玉をのどに詰まらせたとオロオロしているのです。日中、その村には車が一台もなくなります。若い親たちはみな20kmほど離れた町に働きに行ってしまうからでした。急いで私たちの車に乗せて病院に連れて行きました。村にあった小学校もすでにありません。

子どもたちはスクールバスで町の小学校に通っていました。村を歩いていても子どもたちが遊ぶ姿はありません。当時はやりはじめていたテレビゲームに夢中だということでした。そんな中、村の大人たちは月に一度ずつ子どもたちを集めて、身近にある木の名前や鳥の名前を教える活動を地道に行っていました。

「村で生活することは確かに難しくなった。この子たちが村を出て行くことになるのは仕方がない。しかし、自分たちが生まれ育ったこの村を覚えていて欲しい。ここがふるさとだと思っていて欲しい」という大人たちの言葉に込められた想いを、若かった私はよく理解できていなかったかもしれません。

その15年後、農村のへき地小規模校に勤めている卒業生から、自然体験活動のモデル校になったという話を聞きました。なぜ農村の小さな小学校で、わざわざ自然体験活動をするのかとたずねると、その村の子どもたちは放課後や休みの日に一緒に遊ぶ機会がなく、そのために家に閉じこもりがちで自然とふれあう経験もほとんどないのだといいます。訪ねてみると、たしかに子どもたちは遠く離れたところから通学していて、毎日母親の軽自動車の送り迎えが欠かせないことが分かりました。

家に帰ってしまうと、子どもだけではとても友だちの家に遊びに行くことはできません。一方で、その学校が行なっていた自然体験活動は、年に1度都会からインストラクターを招いて、隣町のキャンプ場で、市販のアウトドア教本に載っているような活動をやっているのでした。その村にはサクラマスが遡上する川が流れ、熊が出没する森があるにもかかわらずです。なによりも、時には自然とたたかい、時には自然と寄り添って生きてきた人々が今も暮らしている地域なのです。

これは昨年のことです。学生たちと一緒に、ある農村を訪れました。その地域における暮らしの文化を調べる実習でした。私たちが期待していたのは、山菜やキノコをはじめとする里山の暮らしに出会うことでした。

しかし、そこでわかってきたのは、農家の人たちの方が山菜やキノコを採りに行く機会がないということでした。山菜の時期はちょうど田植えと重なることや、稲作以外にもハウスものなど多角的な経営が求められ、一年中農作業に追われる生活になっていたのです。

とりわけ若い後継者たちは、石油や電気のヒーターを導入して冬でも出荷する「新しい」農業を好む傾向にありました。彼らは山菜やキノコを自分で採ったことがありません。家が所有する山にも行ったこともありません。

後を継いでくれる喜びの顔の裏で父親たちは、「何かおかしいよな」とつぶやきます。その村では、山とかかわる暮らしを経験しているのは80代以上の人に限られています。「家族と一緒に働ける、自然にしたがって暮らせる。だから農業はいいのだ」というお年寄りたちの声にハッとさせられます。

２．変化する農山村

農山村の暮らしが大きく変わりはじめたのは50年ほど前からだと言われています。日本の高度経済成長期とそれは重なります。私が農山村を歩きはじめてからせいぜい20数年ですが、その間にも農山村地域は量的にも質的にも変化し続けてきました。

次に述べる変化は、全国的な傾向というよりも断片的な私見に過ぎません。40年ほど前、農業の近代化にともなって、多くの農山村では現金収入の必要から出稼ぎが急増しました。燃料革命により木炭の需要がガタ落ちし、蓑などのワラ製品やザルなどの竹細工による副収入がなくなったことも出稼ぎに拍車をかけることになりました。しかし、その頃は村の暮らしを成り立たせていた人々のつながりがまだしっかりと残っていました。先に述べた山村では、2月になると雪上運動会を開催し、出稼ぎ先から正月でさえ帰ってこれない人々を呼び寄せていました。村の行事だと仕事を休むことができたのです。村に帰ってくると3メートル近く積もった雪を屋根からおろし、運動会では何ヶ月も会わなかった子どもたちと思い切り遊ぶのです。ところがそれから20年もたたないうちに状況は変わります。自治体の企業誘致の努力によって近隣に働き場所ができると、村の若い世代はそこに働きに出るようになります。週末だけの農作業があたり前になり、そのうち勤めだけで生活が成り立つことを知った人々は、農業そのものをやめて村を離れはじめます。その後の状況は先に述べたとおりです。この時点で、村の暮らしを成り立たせていた人々のつながりは薄れていきます。その人々のつながりが、村の土地や自然とのつながりを土台にしていたことは言うまでもありません。人々のつながりが薄れると土地や自然とのつながりも失われ、それによってさらに人々のつながりが失われます。子どもたちを集めた素朴な自然教育活動に一所懸命とりくむ大人たちは、そのことにきっと気づいていたのでしょう。

近年は、過疎化に加え少子高齢化の波が農山村に押し寄せました。村のお祭りや季節の行事はたいてい子どもからお年寄りまで幅広い世代によって担われていました。そこでいろいろな人たちとふれあいながら子どもたちは成長していたのです。

しかし少子化によって村の行事がなくなったり形骸化してきています。
さらに市町村合併によって学校の統廃合が進みました。それによって子どもたちの生活は大きく変わりました。そして村にとっても、学校がなくなるということは利害関係ぬきで人々が集える場所を失うことを意味します。子どもたちと学校の存在は、村における人々のつながりを常に生みだしてくれていました。地域と合同で行なわれる学芸会、運動会、スポーツ少年団や部活動など、学校はいつも多くの人々を結びつけ、そこでの喜怒哀楽の経験はそのつながりをさらに強く深くしてくれていたのです。

また、農山村の人々と土地や自然とのつながりはどうなっているのでしょうか。テクノロジーを駆使した「新しい」農業を否定するつもりはありません。
けれど、忙しさの中で土地のものをうまく利用した暮らしのあり方がますます失われているように思います。山や川や森を保全しつつも上手に利用する伝統的な暮らしの文化、それから田畑で取れたものを保存したり加工したりしながら家庭の食卓に並べる伝統的な暮らしの文化は、家族や地域の人々が共同で育ててきたものですし、その文化によって人々がつながることができるものです。
そうした文化は、若い後継者や子どもたちにこれからも受け継がれていくのでしょうか。農家の生き残りがかかっているときに、そんな悠長なことは言ってられないというのもわかります。しかし、農山村における人々のつながりは土地や自然とのつながりが土台であることは今も変わっていないはずです。

2. 変化する農山村・・・（つづき）

もうひとつ気になる変化があります。それは農村のビジネス化です。大規模農家や農業法人の育成、異業種の農業参入は、農山村の人々のつながりをどのように変えていくのでしょう。今、表面的に見えていることは農家の個別化です。農業法人という形態はもちろん、それぞれの農家が独立した経営体という性格を強めているようにみえます。しかし、それとは別のところで、まるで反作用するかのように人々が新しいつながりを次々と生み出す動きが活発化しています。やはり、人は一人だけで生きるものではなく、一人だけで生きていけるものでもないのでしょう。女性、お年寄り、青年たちが、新しいつながりをつくりながら、新しい取り組みを様々な人との交流を軸に展開しています。人々のつながりはそう簡単にはなくならないものだと思います。ところが、子どもたち同士の新しいつながりは学校に任せきり、村の人々と子どもたちの新しいつながりについてはあきらめてしまっているようにもみえます。

３．地域のとらえなおし

ここまで村という言葉を使ってきましたが、もう少していねいに説明しなければなりません。地方によって違いますが、古くは村の範囲というのは小字であったという説があります。その範囲で農作業や生活における共同が成り立っていたということです。
物を売ったり買ったりする範囲はもちろんもっと広い範囲で行なわれました。学校についても大字とかもう少し大きい範囲で設けられました。

しかし、子どもたちの教育という点でいうと、村の中においても年齢ごとの集団があって、その中で子どもたちや若者が村で生きていくうえで必要なことを学んでいたのです。

ところが先に述べたように農山村が経験した変化によって、小字単位のまとまりというものを維持できなくなってきます。村の人々のつながりがあって若い世代の人口が多かったときは、その都度工夫して、近くの村へと組織を広げたりなどして対応することはできました。

また、学校に関わる範囲である学区が機能しているところもあります。しかし、人口そのものが減少し、少子高齢化が進行してくる近年の状況はもっと思い切った対策を必要とするようになりました。そのひとつが「地域のとらえなおし」だと思います。
具体的にいうと、自分たちの地域の外の人を含めた「地域」、自分たちの住んでいる地域以外の地域を含めた「地域」、元々住んでいる人たちだけでなく新しく住みはじめた人たちを含めた「地域」という考え方が必要になってきたということです。

80年代にもそれに近い考え方がありました。それは「都市－農山村交流」です。都市の人々と農山村の人々が交流を通じて、都市の人には第2のふるさとを、農山村の人には雇用機会や交流人口の増加をもたらすものとして展開されました。
そしてこれによってうまくいった農山村地域もありましたが、いくつかはうまくいきませんでした。たとえば、スポーツを通じた交流を推進した地域がありました。交流先は人口50万人を越える大都市であり、こちらは人口3000人の山村です。
交流先から訪れた人たちが宿泊できる施設を村に建設し、釣りやスキーを楽しんでもらうことに加え、子どもたちが1年おきに訪問しあうという交流事業もスタートさせました。

交流先の大都市ではサッカーが盛んだったため、子どもたちの交流もサッカーを通じて行なおうということになりました。ところが、最初の年に村を訪れた子どもたちは、市の大会を勝ち抜いてきたサッカー少年団であり、迎える村の子どもたちは低学年の子どもや女の子もいる即席チームです。ユニフォームさえそろっていません。結果は言うまでもありません。なぜこういうことになったかというと、交流先の都市の文化に合わせた交流事業だったからだと思います。
都市のための農山村という暗黙の了解のようなものが、どちらにもあったのではないでしょうか。しかも、一過性のイベント的交流では農山村を支えるだけの人々のつながりを生み出しませんでした。

「地域のとらえなおし」は地域外の人たちとの交流を含みますが、あくまでも自分たちの「地域」が、都市を含むほかの地域へと広がっていくという考え方です。
つまりは都会に住んでいる農山村に魅力を感じる人たち、農山村の文化にふれたい人たち、農山村で暮らしたい人たちを含みこんだ「地域」です。しかも一過性の交流ではなく、そこで暮らしはじめた人たちとの継続的なかかわりが展開する可能性を持っています。
そこにおける子どもたちの交流を想像してみると、都会から来た子どもたちに村の子どもたちが春の山菜、夏の釣り、秋のキノコ、冬はソリ遊びやスキーを教えてあげるとか、田畑の作物や家畜のことを教えてあげるというものになるでしょう。それによって子どもたち同士の新しいつながりができ、農山村で暮らすことのよさや、土地や自然とむすびついた「ふるさと」という感覚を養っていくことができます。

しかし、農山村の子どもたち自身にそうした経験や知識が少なくなっていうことはこれまで書いたとおりです。だからこそ、農山村の子どもたちが自分たちの暮らしている場所で、一緒に遊んだり、その遊びを通じて人とのつながりや土地や自然とのつながりを学び身につけていくことが必要になっているのです。しかも日常的にそれが行なわれることが大切です。

4. 自然学校の可能性

現在、日本全国で自然学校といわれる団体が活発に活動しています。その多くは都市に住む人たちのための自然体験を提供することを目的にしています。
そして人口密度の高い日本では、自然学校といえども農山村の中に拠点を置くことがほとんどです。しかし、提供される自然体験は農山村の暮らしとは切り離された、どこからか輸入されたプログラムであることが多かったのです。そうなると、自然学校は地元の子どもたちになかなか目を向けないし、地元の大人たちも何か変わったことをやっている集団だと、違和感を感じてしまいます。
そうした例がまだまだ多い中、福島県鮫川村を拠点とする「あぶくまエヌエスネット」は、設立当初から地域に基盤を置いて活動してきた自然学校です。
つまり地域に根ざした自然学校だといえます。
「地域に根ざす」とは何かというと、それは「人に根ざすこと」「土地に根ざすこと」「文化に根ざすこと」ということだと思います。この3つのことを大切にすることによってはじめて、自然学校は「地域」の一員としてみなされるのだと思います。
「あぶくまエヌエスネット」はまさにその3つの要素を合わせ持った自然学校であり、地元の子どもたちの置かれた現状をよく理解し、この「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」に取り組むことになったのは当然のことだと言えるでしょう。

さらに自然学校は、様々な人やモノやコトを結びつける媒介としての性格を持っています。そして都市の人に自然体験を提供すること自体は大切なことです。
しかし、都市の人と何とを結びつけるのかということを慎重に考えないと、地元地域が視野に入ってこないことになります。
平成19年度からはじまった本事業の取り組みにおいて、「あぶくまエヌエスネット」は鮫川村の青生野地区において、「放課後自遊教室」「週末地域サポート事業」「わくわく交流事業」の3つを展開してきました。ここにおいてまず、同地区の子どもたち同士を結びつけます。そして「あぶくまエヌエスネット」で研修している外国人の皆さんと子どもたちを結びつけます。またいろいろな遊びを通じて土地と子どもたちとを結びつけます。
さらに長期休暇の時には外から来た子どもたちと地元の子どもたちを結びつけます。そしてこれらの活動は、平日、週末、長期休暇と継続的に続けられ、まさに子どもたちの日常生活の中に、人との新しいつながり、土地や自然との新しいつながりを生み出しているといえます。
こうした活動を必要としている地域は日本中にたくさんあるのではないでしょうか。村の中でこうした活動をはじめることができるところもあるでしょう。
様々な変化の中で、村だけでは展開できないところもあるはずです。
そうした地域でも、「あぶくまエヌエスネット」のような視野をもった自然学校のお手伝いがあることで、いきいきとした活動をはじめられるのかもしれません。

大切なのは、自然学校が拠点としている農山村としっかり向きあって、その村が被ってきた変化、そこでの人々の苦労や努力、そして子どもたちが置かれた現状を理解することだろうと思います。そして人に根ざし、土地に根ざし、文化に根ざすことで、さらに地域の人々と手を取り合っていくことができるでしょう。

前田和司
北海道教育大学岩見沢校準教授
1962年青森県生まれ
筑波大学大学院体育研究科修了
農山村・スポーツ・環境が研究テーマ
2006年、北海道教育大学岩見沢校にアウトドア・ライフ専攻を設立。人と自然が調和した生活を創造できる人材の育成に取り組んでいる。